

~~~~~  
\*\*\*戸塚・原宿教会だより 2008/1～2009/6 に連載したもから抜粋 \*\*\*

<連載> サンティアゴの道を再び、111 キロ 山本 順



### <まえがき>

2年前、2005年8月3日から35日間、学生時代の寮生仲間4人でカミノ・デ・サンティアゴ“星降る道”の700キロの巡礼に挑戦した。暑くて、痛くて、辛くて、そして、とても楽しい体験をした。この時、多くの友人がいろいろな形で応援してくれた。その中の一人、竹内氏は東京に居ながら巡礼中の我々を地図で追い、毎週2、3回、こまめに励ましの携帯電話をくれた。そして、その竹内氏が2006年ヤコブの祝日7月25日に、同じ寮仲間の一人である宗神父（イエズス会）から洗礼をうけた。洗礼名が、なんと“サンティアゴ・デ・コンポステラ”。然らば「当然のことながら巡礼に行かねばならないぞ」と、即刻、決断した。

今回の仲間4人の夫々が何らかの健康上の問題を抱えていたので、特に海外での歩行は不安だらけの冒険に思えた。しかし、年齢を考えると、この機会を逃せば二度と実現は不可能のように思えた。コンポステラーノ＝巡礼証明書を貰うための最低条件である“歩いて100キロ”を目標に、決して頑張らない、しかし、諦めない、そして楽しく歩くことにした。

巡礼が終わった今、「やっぱり行っておいて良かった！」とつくづく思う。



この巡礼記は、所属教会発行の“教会だより”に2008年1月から2009年6月までの間に12回にわたって連載された（文章だけで編集され、写真は一枚も入っていない）ものでした。それが15回HPへの掲載に相応しい内容なのか？ 見るに堪えるものか？ 何回で終わるか？ 全くわかりませんが、思い切って原文の半分以上を削除し、空きスペースに写真を張り付け、安嶋氏のアドバイスをいただきながら、少しずつHPへの寄稿を試行してみました。さて、どうなることやら。

2009年10月

## (1) サンティアゴ巡礼のルーツ、パドロン

2007年10月27日(土) 巡礼を終えた日の午後、サンティアゴ巡礼のルーツを見届けたくて、更に西方へ20キロ、高速路線バスで30分程の、古代ローマが築いた小さな港町パドロンへ足をのびした。

サル川沿いのローマ橋の袂に古い石造りの教会を見つけて薄暗い中に入った。祭壇中央には幼子を左手で抱いた聖母マリアの立像があり、その祭壇下に高さ1メートル程、大人が両手で輪を作った位の太さの白い石が立っていて、その上部は繰り抜いたようにへこんでいて献金らしい小銭が数枚入っていた。伝承によれば、十二使徒の一人ヤコブの遺骸を乗せた小舟がその弟子たちによって地中海7日間の航海の末、当時イリア・フラビアと呼ばれていたパドロンに漂着し、この石に小舟を繋ぎとめ、この石の上に遺骸を乗せたという。



聖堂の側面には、サンティアゴ巡礼道ではしばしば見かけるのだが、サンティアゴ=聖ヤコブが白馬に跨って勇ましく剣を振りかざしてイスラム兵を踏みつけている高さ2メートル程の像があり、大きなガラス張りのケースの中からじっとこちらを見下ろしている。主イエスの死後、閉じこもっていた弟子たちに聖霊が降り、勇気づけられ、やがて夫々各地に宣教に出かけた。ヤコブは何故かスペインへ赴いた。7年後、七人の弟子とともに再びパレスティナへ帰り、多くのユダヤ人を改宗させた。これを快く思わなかった大祭司はローマ兵を遣って逮捕した。紀元44年、ヤコブはヘロデ王によって斬首され、十二使徒最初の殉教者となった。遺骸は弟子たちによって密かに小舟で運び出された。9世紀初頭になって、ヤコブとその弟子たちの墓は、異様に輝く明るい星に導かれた隠遁修道士ペラヨや地元の住民達に発見された。イベリア半島

北部の国家アストゥリアスの国王アルフォンソII世はこの地に教会を建て、ヤコブをこの国の保護の聖人に定めた。以降、その地はサンティアゴ・デ・コンポステラと呼ばれるようになった。コンポステラとは“星の原野”という意味だそう。ヤコブの墓の発見のニュースは各地に伝えられ全国から巡礼者が多数訪れるようになった。折しもレコンキスタ=国土回復運動の真っ只中、紀元834年、クラビホの戦いで聖ヤコブが白馬にまたがって現れ、七万のイスラム軍を撃退させたのである。これらのことは12-3世紀に編纂された「聖ヤコブの書」「黄金伝説」に記されているそうだ。(つづく)